〔コミュニケーション情報学科〕

【翻訳】

リサ　シャーク著

『紛争アセスメントと平和構築プランニング』ウェブサイト

「鍵となる概念」

石原　明子、桑原　恭平 訳

Lisa Schrich : Conflict Assessment &Peacebuilding Planning Website : Key Concepts

Translated by Akiko Ishihara & Kyouhei Kuwahara

要旨（Abstract）

This paper is a translation of one part titled “Key Concept” of the website “Conflict Assessment and Peacebuilding Planning”, which is an online resource website for the book “Conflict Assessment and Peacebuilding Planning—Toward A participatory Approach to Human Security” written by Dr. Lisa Schrich. Dr.Schrich gathered, categorized, and synthesized a variety of similar conflict assessment frameworks developed by governments, universities, and NGO’s in the world, and published the book above. The key concept chapter of the website shows central concepts of the book and summary of the book.

The translation consists of six parts: 1）why conduct a conflict assessment?, 2）what does conflict assessment include?, 3）who should participate in a conflict assessment process?, 4）data quality, 5）moving from conflict assessment to planning, 6）framework for conflict assessment and peacebuilding planning.

Through a participatory assessment process using the tools in the book, people can build strategies for peacebuilding they need.

キーワード（Keywords）：紛争、コンフリクト、アセスメント、紛争分析、平和構築、プランニング、戦略

はじめに

本翻訳は、リサ・シャーク著『紛争アセスメントと平和構築プランニング―人間の安全保障への参加型のアプローチに向けて』（Lisa Schrich : *Conflict Assessment and Peacebuilding Planning—Toward A Participatory Approach to Human Security*, Kumarian Press. 2013）という書籍のためのオンラインリソースとして作られた「紛争アセスメントと平和構築プランニング」ウェブサイト[(1)]の一部「鍵となる概念（キーコンセプト）」の翻訳である[(2)]。この「鍵となる概念」は、書籍『紛争アセスメントと平和構築プランニング―人間の安全保障への参加型のアプローチに向けて』のサマリーとして位置づけられている。

シャークは、草の根型の平和構築に強い伝統をもつ北米のメノナイト派の平和構築の研究者そして実践者であり、紛争変容（conflict transformation）の概念を提出したJ・P・レデラック（J.P. Lederach）の流れを直接くむ。米国のジョージメイソン大学（George Mason University）の紛争分析と解決専攻でPh.Dを取得する傍ら、20代で米国のイースタンメノナイト大学（Eastern Mennonite

受付日：2018年10月９日
受理日：2018年11月９日

University）で教鞭を取り始め、30代で大学のフルタイムの教職を去り、より実践に近いNGOでの仕事に入っていた。2018年現在は、主にThe Toda Peace Instituteの北米研究ディレクター、そして、ワシントンDCをベースとするNGOであるThe Alliance for Peacebuildingの上席政策アドバイザーとして活動している。

とくにワシントンDCでのNGOの活動の趣旨にも関係するが、彼女の特筆すべき点は、メノナイト派が出した研究者・実践者の中でも極めて優れた業績を出した人物であったというだけではなく、メノナイト派が世界の紛争地での草の根の平和構築実践を行ってきたのに対して、米国内で米国政府に、直接働きかけたり平和構築教育を施したりするような実践に舵を切っていったことにある。それは、世界の主な紛争地は米国外であるが、実はその紛争に米国のありようが深く関わっているという構造に対して、紛争地で直接草の根の実践をするのみならず、その紛争の原因にも多く関わる米国のあり方や文化に直接の変化をもたらさなければならない、と考えるようになったからである[(3)]。

彼女は、アフガニスタン、パキスタン、イラク、スリランカ、インドネシア、ケニア、フィジーといった紛争を抱える現地で、現地の人々や利害関係者と共に紛争アセスメントと平和構築のプランニングを行ってきた経験を携え、現在までには、UNDP、世界銀行、米国政府などの紛争アセスメントと平和構築プランニングのコンサルタント、そして、米国政府あるいは米国内の安全保障関連の諸機関に対して平和構築のトレーニングを行ってきている。

シャークは、20代終わりから30代にかけての大学での教授時代、その後のNGO時代を通じて、平和構築に関して、多くの現場に有用なかつ知的にも学術界に貢献する本を出版し続けている。その中で2013年に出版された書籍『紛争アセスメントと平和構築プランニング―人間の安全保障への参加型のアプローチに向けて』は、様々な研究者や現場実践者が開発してきた紛争アセスメントあるいは平和構築へ向けてのツール（主に分析ツール）を一堂に集め、整理したものである。このツールを用いて現場の紛争を分析・アセスメントしていくことで、単に紛争の性質を理解するだけではなく、平和構築へのプランニングが自然にできていく構成になっていることが特質として挙げられる。筆者自身も、このツール（正確には上記書籍のドラフトとして作成された「紛争アセスメントと平和構築プランニング・ハンドブック」というイースタンメノナイト大学で使われていた教材）を用いて、日本の東日本大震災後の原発災害下での人間関係の葛藤というコンフリクトの分析を行い、介入・支援計画を策定したという経験をもつ。シャーク自身は、主に国際紛争・内戦といった文脈からこのツールを開発してきたが、このツールはそのような紛争のみならず、原発災害下での人間関係の分断のような環境災害下でのコンフリクトや、国内の組織や家庭・地域社会でのコンフリクト（対立・葛藤）の分析にも活用可能である。実際、熊本大学大学院社会文化科学研究科の交渉紛争解決・組織経営専門職コースでは、日本国内の多様な現場で働く社会人院生たちが、このツールを用いて、日本の各現場でのコンフリクトの分析を行ってきた。

今回翻訳したものは、『紛争アセスメントと平和構築プランニング―人間の安全保障への参加型のアプローチに向けて』の書籍自体ではない。この書籍に付随したオンラインリソースとして、シャークらは、「紛争アセスメントと平和構築プランニング」ウェブサイトを設けており、その一部である「鍵となる概念」は、『紛争アセスメントと平和構築プランニング―人間の安全保障への参加型のアプローチに向けて』の要約として書かれたものであり、シャークが考える「紛争アセスメントと平和構築プランニング」の理念や概要のを理解するのによい導入となっていると考え、翻訳することとした。

主な訳語について

この翻訳をするにあたり、訳語の選択についていくつかの点を述べておきたい。まず、conflictという言葉は、日本語では、現場的文脈において「紛争」「葛藤」「対立」「問題」など様々な言葉で表現され、総称して「コンフリクト」とカタカナで表記されることもあるが、この翻訳では、わかりやすさのための「紛争」という言葉で統一して訳することとした。

次に、assessmentという言葉については、「評価」という日本語で訳することも考えたが、「評価」という言葉は英語ではevaluationを想像されることも多い。その中でこの書籍とウェブサイトでは、assessmentとevaluationは違う言葉として使い分けられているため、assessmentはカタカナで「アセスメント」、evaluationは漢字で「評価」という言葉で訳出することとした。

タイトルのpeacebuilding planningのplanningの部分は、「計画」と訳することも考えたが、計画する行為をあえて意識するために、カタカナで「プランニング」と訳出することにした。

また、本文中に現れるdrive（conflict）とmitigate（conflict）という言葉については、「（紛争を）促進する」「（紛争を）緩和する」という訳語を、localという言葉については「ローカルな」「局所の」「現地の」という訳語を検討した結果「現地の」の訳語をあてることとした。theory of changeは、国際開発業界で多く用いられてきた言葉であり、近年では日本でも「セオリー・オブ・チェンジ」として知られつつもあるが、ここでは理解のしやすさのため、「変革の理論」と訳することとした。

訳

『紛争アセスメントと平和構築プランニング』ウェブサイト　より

「鍵となる概念」(4)

1．なぜ紛争アセスメントを実施するのか

私たちの紛争や暴力に対する分析や理解は、私たちのそれらに対する反応を形成している。

・紛争アセスメントは、紛争を促進したり平和を支援したりする要因を正確に特定し、優先順位を付けることによって、暴力的紛争や大量虐殺を予防し対応する取り組みを改善する。紛争アセスメントは、取り組みの有効性と持続可能性を改善することができる。
・紛争アセスメントは、平和と安全の目標に逆効果である負の2次的、3次的影響の可能性を低減させる。

多くの平和構築の計画者は、計画の成功のためには「急がば回れ」であると理解している。行動を急ぐことは、しばしば善意の行動が大きな逆効果をもたらす可能性があることを意味する。

自信過剰：「できる」という態度と「分析麻痺」の恐怖によって、人々は、紛争アセスメントのための研究をおろそかにしてしまう。「私たちが何を知らないのかを知る」という謙虚さの欠如は、未検証の仮定や画一的な推測に基づく政策やプログラムにつながる可能性がある。

未検証の仮定：人々は、既存の紛争の見方を強化する傾向がある。

組織の関心：紛争を促進する要因や緩和する要因についての実際のアセスメントよりも、既存の組織の能力によって紛争対応プログラムが形作られてしまうことが、余りに多い。

2．紛争アセスメントには何が含まれるか

紛争アセスメントは、ニーズアセスメント、文脈アセスメント、または情報アセスメントと同じものではない。紛争アセスメントは、紛争分析としても知られるが、相互作用的な調査プロセスである。より効果的な平和と安全保障の政策、プログラム、プロジェクトを可能にするために、紛争を促進する要素や平和を支える要素を概念的に整理するものである。

世界中の政府、大学、NGOは、さまざまな類似の紛争アセスメントのフレームワークを開発してきた。これらのフレームワークを統合する作業によって、これらの構成要素にまで集約させることができる。以下の6つの質問は、計画に関連する決定に直接関連している。

・どこで紛争が起こっているのか。統治機構は機能しているのか。
・誰が紛争を促進していて、誰が平和を支えているのか。
・なぜ主要な当事者らは紛争を促進したり、または緩和したりしようとするのか。
・何が紛争を促進し、または緩和しているのか。
・どのような方法で主要な当事者らは紛争を促進し、または緩和しているのか。どんな手段でか。
・過去に紛争が拡大または縮小したのはいつか。また将来における平和への機会の窓と脆弱性の窓の予測はどのようなものか。

他の多くの紛争アセスメントのフレームワークは、紛争を緩和し平和を支える現地の能力、回復力、要素を検討することなく、紛争だけに焦点を当てている。それに対して、このアプローチでは、紛争を促進する要因と同時に、既存の能力や、紛争を緩和する要因をもマッピングする。

「紛争を促進する要素」には、利害関係者とその手段、動機、主な苦情をマッピングしたり、紛争を促進する要因間の関係を整理したり、紛争の歴史的遺産の中で地域の文脈や脆弱性の窓から生じる問題を特定したりする様々なレンズ（分析ツール）が含まれる。紛争を緩和する要素には、平和を支える利害関係者をマッピングしたり、リジリエンス（回復力）と社会資本を支える現地の伝統、価値観、そして団体を特定したり、平和構築への可能な機会の窓をアセスメントしたりする様々なレンズが含まれる。

3．紛争アセスメントの過程に誰が参加すべきか[5]

紛争のアセスメントには、当事者だけでなく部外者を含む多様な利害関係者との対話が必要だ。部外者が持つ何が紛争を促進しているのかに関する仮定と、地元に住む当事者による洞察には、しばしば大きなずれがある。

極めてしばしば、政府は、部外者に当事者の役割を「果たす」よう求めながら、迅速な紛争アセスメントチームや独立したチームを使用する。このようなアセスメントチームは適切ではない。組織は、時間を節約しようとする取り組みの中で、自分たち自身の推測で、紛争アセスメントフレームワークを埋めていってしまう。個人またはグループは、紛争が起こっている場所から数千マイル離れた机に座って紛争のアセスメントを行う。ときに、紛争アセスメントの組織は、10人、20人の政府職員やエリートの市民社会代表者にインタビューするのに地元の通訳者を使う外国人チームを送る。しかし、これも歪んだ分析を引き起こすことが多い。

多様な現地の利害関係者からのより多くのインプットなしでは、紛争アセスメントチームが外国文化の価値観や内在する世界観を推測したり、現地が持つ既存の能力をどのようにマッピングするかを知ったりすることはできない。紛争アセスメントチームは、自分たちの、外国における現地力学を理解する能力に過剰な自信を持ってしまっており、どんな人やグループでももっているその人やグループが継承してきたバイアスの理解を欠いていることがあまりに多すぎる。これは、未確認の仮定に基づく不正確なアセスメントをもたらし、誤った変革の理論に基づく計画プログラムにつながる。

一方で、市民社会、ビジネス、メディア、政府、部外者/外国人の多様な部門を含む複数の利害関係者による紛争アセスメントフォーラムは、変化を続ける現地力学に継続的な洞察を与え、紛争にポジティブな影響を及ぼすことができる平和構築介入の仕組みとして機能する。現場では、当事者と外部の人々によるチームが、地元のメディアや投票を監視したり、援助コミュニティのローリング紛争アセスメントレポート(6)を作成するためのフォーカスグループインタヴューを実施したりするために、協力して働くことができる。紛争アセスメント調査は、グループディスカッションやフォーカスグループをファシリテートする(7)ことができる訓練された調査者を使用して、参加型で行うべきである。

4．データの質

紛争アセスメントの良いフレームワークだけでは不十分である。不正確または不十分なデータが完全なフレームワークに入れられると、誤った紛争アセスメントになってしまう。これでは、うまくいかない紛争介入に時間と費用を浪費することになる。

このハンドブックには、調査プロセスに関する以下のガイダンスが含まれている。

正確で信頼性が高く、三角測量されたデータソースを収集する。データソースには、本、報告書、ブログ、ニュース記事、ツイッターフィード、投票率、インタビュー、フォーカスグループ、観察、そして、このハンドブックに書かれた複数の利害関係者によるワークショップのための相互作用的な手法が含まれる。

各データソースの質を評価する。データ間でのギャップ、あるいは、不確実もしくは矛盾するデー

タがある箇所を特定する。なぜデータが矛盾しているのかについての仮説を特定する。さらなる情報を収集する計画を立てる。調査者は以下のことを問うべきである。
・我々に欠けている情報は何か。
・誰からの視点を、我々は追求すべきか。
・我々は、その情報を発見するためにどのような調査プロセスを用いることができるか。

5．紛争のアセスメントからプランニングへ

このハンドブックは、より良い政策の一貫性と紛争予防と平和構築への包括的なアプローチを達成するための自己アセスメント、紛争アセスメント、変革の理論、設計、モニタリングと評価といった紛争アセスメントフレームワークの各要素（下記 6 のフレームワークを参照）を同期させるための、概念的枠組みを提供する。

⑴**自己アセスメント**とは、紛争に関する自らの文化的バイアス、視点、利害、仮定を明らかにし、そして、何が可能で実用的かに基づいてプランニングを優先順位付けするために自らの資源、能力、ネットワークを特定するプロセスである。自己アセスメントは、最終評価に至るまで、アセスメントサイクル全体を通して常に行うプロセスである。自己アセスメントを行うことで、その紛争に対する自分の文化的バイアスや視点を明らかにすることができる。『紛争アセスメントと平和構築プランニング』ハンドブックには、平和構築のための取り組みを計画しているグループの潜在的な強みと課題を検証するための一連の自己アセスメント質問が含まれている。質問は次のとおりである。

・どこで取り組むのか。
・誰と取り組むのか。
・なぜそのような取り組みをするのか。
・何に取り組むのか。
・どのように持てる力を平和のためにシフトするのか。
・いつが平和構築のための取り組みを行う最良のタイミングなのか。

⑵**変革の理論**、もしくは「プログラムの論理的根拠」は、紛争を促進したり、平和を支えたりする鍵となる要素の間の知覚される論理と、どのようなタイプの平和構築の取り組みが平和を構築し暴力を予防するのかを引き出し、特定する。人々はどのように変化が起こると思うだろうか。彼らの物語、寓話、隠喩、アイデアとはどのようなものか。『紛争アセスメントと平和構築プランニング』ハンドブックでは、今日の多様な利害関係者により使用される幅広い変革の理論を明らかにしている。理想的には、計画立案者たちは、起こりえそうな効果を評価するために、これらの可能な変革の理論に関連する調査を、詳しくすべきである。

⑶**デザイニングとプランニング**は、具体的で（specific）、測定可能で（measurable）、達成可能な（attainable）、現実的で（realistic）、タイムリー（timely）という、賢い（SMART）目標を特定するプロセスである。計画には、誰と取り組むか、何をするか、いつ、どこで行うかを決めることが含

まれる。紛争アセスメントのフレームワークは、平和構築の取り組みの設計と計画のプロセスと直接関連する質問をする。『紛争アセスメントと平和構築プランニング』ハンドブックでは、様々な方法で平和構築活動を拡大することによってミクロな効果からマクロな効果に移行する戦略を開発する方法を、詳述している。本書は 平和構築活動の目標、主要な聴衆、活動、時間枠、成果、結果、および影響をレイアウトするための計画ロジカルフレームワークの輪郭を描く。

⑷**モニタリングと評価（M＆E）**には、短期的な成果と結果、ならびに、複数のアクター、複数のプログラム、および複数のセクターの長期的な互いに関連する影響の測定が含まれる。理想的には、モニタリングと評価のために選択された指標は、特定された変革の理論にリンクしている。調査方法は、期待される成果、結果、影響、平和構築活動の持続可能性のレベルに基づいて、これらの指標ためのデータを収集する。最終的には、様々な平和構築活動が、より広い人間の安全保障指標に影響を及ぼすために、互いに同期して調和すべきである。

6．紛争アセスメントと平和構築プランニングのフレームワーク

紛争アセスメントと平和構築プランニングのまとめの表

	自己アセスメント	紛争アセスメントレンズ	変革の理論（セオリー・オブ・チェンジ）	平和構築プランニング
どこで	あなたは、どのくらい現地の文脈、言語、文化、宗教などを理解しているでしょうか。あなたは、どこで活動をするでしょうか。	どこでその紛争は起こっているのでしょうか—どのような文化、社会、経済、司法[8]、政治の文脈もしくはシステムの中で、起こっているのでしょうか。	もしその文脈のあるXという部分が紛争や分断の根っこであったり、あるいはリジリエンスや人々の間のつながりの基礎を与えていたりするのだとしたら、何がそれらの要素に影響を与え得るでしょうか。	その文脈は、あなたの取り組みとどのように相互作用するでしょうか 自己アセスメントをしてみたうえで、紛争を促進する文脈上の要素に影響を与えるあなたの能力や、制度的そして文化的なリジリエンスを強化するあなたの能力を、同定してください。
誰が	利害関係者マップの中であなたはどこにいますか。 どこにあなたは社会的資源をもっているでしょうか。 鍵となるアクターの中でどのアクターとあなたは関係をもてているでしょうか。	誰が利害関係者でしょうか—その紛争の中で誰が関係あるいは利害をもっているでしょうか。	もしあるXという個人やグループが紛争を促進していたり緩和していたりするならば、どのような行為が彼らを変化させるインセンティブとなりえるでしょうか。	あなたは誰と活動しますか 自己アセスメントを行ったうえで、鍵となる利害関係者間の関係を良くするため、あるいは、利害関係者間の平和構築役割をする鍵となるアクターを支えるために、誰と活動すべきかを決めてください。

	自己アセスメント	紛争アセスメントレンズ	変革の理論（セオリー・オブ・チェンジ）	平和構築プランニング
なぜ	利害関係者たちは、あなたの動機をどのように受け止めるでしょうか。	利害関係者たちは、なぜそのように行動しているのでしょうか。彼らの動機は何でしょうか。	もしあるXというグループが紛争を促進したり緩和したりするのに動機付けられているのだとしたら、何が、彼らの動機を変化させたり支えたりするでしょうか。	なぜあなたは活動するのですか あなたの動機自体と、利害関係者があなたの動機をどのように受け止めるかについての自己アセスメントをしたうえで、それらがどのように、鍵となるアクターたちの動機と提携し得るかを明らかにしてください。何があなたの目標でしょうか。
何を	紛争の鍵となる促進要素と緩和要素に取り組むために、あなたには何をする能力があるでしょうか。	紛争を促進したり、緩和したりする要素は何でしょうか。	もしXという力の源泉が紛争を促進していたり、あるいは緩和させていたりするならば、これらの要素に影響を与えるのはどのような行動でしょうか。	あなたは何をしますか 自己アセスメントを行ったうえで、どの促進要素と緩和要素にあなたは取り組むかを特定してください。
どのように	あなたの資源、手段、力の源泉は何ですか。	紛争はどのように現れているでしょうか。何が利害関係者たちの手段で力の源泉なのでしょうか。	もしXという力の源泉が、紛争を緩和しているならば、何がこれらの力の源泉に影響を与えることができるでしょうか。	平和を支えるうえで、力の源泉をあなたはどのように変換させるでしょうか 自己アセスメントの上で、促進要素を減らし平和への現地の能力を増加させるためのあなたのキャパシティを明らかにし、優先順位付けしてください。
いつ	脆弱性の窓と機会の窓に素早く反応する能力を、あなたはもっていますか。	その紛争において何かが起こる歴史的なパターンや周期はありますか。	もしXというタイミングが暴力や平和が起こりやすいとしたら、これらのタイミングに何が影響を与えることができるでしょうか。	あなたの平和構築の取り組みにとってのベストタイミングはいつでしょうか 歴史的なパターンを調べたうえで、潜在的な機会の窓もしくは脆弱性の窓、潜在的な引き金、そして従来のシナリオの傾向を明らかにしてください。

注

（1）ウェブサイト「Conflict Assessment &Peacebuilding Planning」http://conflict-assessment-and-peacebuilding-planning.org/　2018年10月31日に閲覧かつ最終閲覧。ただし、本翻訳3節のみは、2017年8月1日に

閲覧かつ最終閲覧。

（２）本ウェブサイトの翻訳は、2017年８月１日に閲覧した３節の分も含め、著作権者であるリサ・シャーク氏の許諾を得た翻訳である。

（３）訳者の石原明子は、2011年から2014年にかけて、長期滞在を含め、シャークが元々フルタイムとして教授をつとめて退職後には非常勤の研究教授をつとめる米国のイースタンメノナイト大学で研究を行っていたが、そのときに、シャーク自身との会話の中で語られたことである。また、この話は、彼女の大学の講義の中でも時々言及された。

（４）今回の翻訳は、2018年10月31日時点でのウェブサイト「Conflict Assessment &Peacebuilding Planning」http://conflict-assessment-and-peacebuilding-planning.org/（2018年10月31日に閲覧かつ最終閲覧）に基づいている。ただし、翻訳３章のみは、2017年８月１日時点でのウェブサイトに掲載されていたものの2018年10月31日時点では掲載されていないが、内容的に重要と考え、著者シャーク氏に確認（2018年10月29日）のうえ、2017年８月１日掲載の文章をもとに翻訳をしている。

（５）この「３．紛争アセスメントに誰が参加すべきか」のみは、上記のとおり、当ウェブサイト2017年８月１日の閲覧に基づいて翻訳している。

（６）ローリング紛争アセスメントレポートとは、ローリング調査方式による紛争アセスメントレポートのことである。ローリング調査方式とは、すべての調査区をローラーをかけるように網羅的に調査する方法で、複数年（複数時期）に分けて網羅することが多い。

（７）ここで「ファシリテートする」とは、「グループディスカッションやフォーカスグループインタヴューでの話し合いの司会（対話促進）をする」という意味である。

（８）この司法という言葉の元の英語は、justiceである。正義とも訳せるが、ここでは司法と訳出した。